

京大広報

No. 497

京都大学広報委員会



日本一を喜ぶアメリカンフットボール部の選手たち —関連記事本文1102ページ—

目次

新年を迎えて	総長 井村裕夫…1091	< 栄誉 >	
< 大学の動き >		武内義範名誉教授, 中川久定名誉教授, 山田	
新年名刺交換会……………	1092	康之名誉教授が日本学士院会員に選ばれる……………	1097
部局長の交替等……………	1092	— 公開講座 —	
名誉博士称号贈呈式……………	1092	農学部「生物のマクロから超ミクロまでの	
外国人研究者との懇談会……………	1093	スケルトラベル体験」……………	1099
平成8年度国立学校特別会計予算内示		< 保健コーナー >	
(本学関係)の概要……………	1094	突然死と虚血性心疾患……………	1100
平成7年度国立学校施設整備事業の決定		— 京都大学の百年 (第15回) —	
(追加)……………	1095	京都帝国大学以文会と学生集会所……………	1101
職員会館の閉鎖……………	1095	アメリカンフットボール部8年ぶり4度目の日本一1102	
< 部局の動き >		日誌……………	1102
故藤本浩之輔教授追悼の集い……………	1095	計報……………	1103
故高谷秀正教授追悼の集い……………	1095	< 随想 >	
平成7年度文学部博物館秋季公開展示……………	1096	町の天文台から	名誉教授 小暮智一…1104
医学教育ワークショップの開催……………	1096	< コラム >	
		それは教えられません	清水 章…1105

新 年 を 迎 え て

総 長 井 村 裕 夫

新年おめでとうございます。平成8年の年頭にあたり、新年の御挨拶とともに所感の一端を述べさせていただきます。

平成7年は阪神・淡路大地震、オーム真理教事件、経済の低迷、政治の混乱と暗い事件の多い年でありました。震災では京都大学の関係者で被害に遭われた方もありましたが、それを除いては京都大学としてはほぼ順調な一年であったと考えます。昨年4月には総長特別補佐制度を発足させ、西川禱一、佐藤幸治両教授に就任して頂いて、将来構想の実現や百周年記念事業など、京都大学の様々な課題について助言や補佐をして頂く体制が整いました。一昨年発足した高等教育教授システム開発センターは昨年第二部門を設置し、いよいよ本格的な活動を始めました。工、農、医、理学部の大学院重点化も順調に進みました。また新しい構想による学内共同利用のベンチャー・ビジネス・ラボラトリーが工学研究科を中心に、また全国公募の結果選ばれたセンター・オブ・エクセレンス (COE) が医学研究科を中心に設けられました。

さらに年末の予算の内示で、将来構想検討委員会によって提案された新しい構想に基づく独立研究科として、21世紀の世界の最大の課題の一つであるエネルギー問題を研究するエネルギー科学研究科の新設が決まりました。同時に文学部、経済学部の重点化も決定しましたし、また新しい構想に則ったアフリカ地域研究専攻が人間・環境学研究科の中に独立専攻として設けられることになりました。研究所関係では、エネルギー理工学研究所の新設、防災研究所の改組も認められ、京都大学が新しい世紀に向けて飛躍的な発展をはかる基礎が着実に整備されて参りました。これも関係各位の御盡力と事務局の方々の熱心な御支援によるものと感謝しております。

さて新しい年の課題であります。私は教育の充実を何よりも重要な課題として取り上げたいと思います。京都大学では、従来ややもすれば研究に重点が置かれるあまり、教育への配慮が少なくなるきらいがあったことは否めません。大学院重点化がその傾向に拍車をかけることになっては大きい問題であります。大学時代には、将来豊かな成長をもたらすための基礎をしっかりと作るべきであります。高校までの教育が、ややもすれば知識の詰め込みとなりやすい我が国の現状を考えますと、大学教育のあり方こそ我が国の将来の命運を決定するものになると言っても、言い過ぎではないでありましょう。幸いにして全学共同利用の高等教育教授システム開発センターに専門家が揃いましたので、各学部で是非教育のあり方を再検討して頂きたいと希望しているところであります。

昨年秋には科学技術基本法が制定され、我が国の科学技術の振興に関する施策を総合的に推進する法的な基盤が整備されました。それに従って本年度の予算でも科学技術費が10%を越える伸びを示しています。そのこと自体は大変結構なことではありますが、しかし研究費を増額すれば、すぐにすぐれた研究が我が国から生まれることを期待することは、必ずしもできません。それは研究には未知の世界に思い切って挑戦する気概のある、創造力に富んだ人材を育成することが同時に重要だからであります。そのためには大学の教育環境を整備し、京大初代総長木下廣次先生の言葉を借りれば「自発自得」の精神を持った若い人々を生み出していかねばなりません。教育の内容の改革を行わない限り、現在進行中の大学改革も形骸化してしまうことは必至であります。

新しい年京都大学は、大学改革を深化させて教育・研究を充実させるべく全力を盡さねばなりません。教職員の皆様の御支援をお願いし、併せて皆様の御健康、御活躍をお祈りして、私の挨拶とさせていただきます。

<大学の動き>

新年名刺交換会

本学恒例の新年名刺交換会が、1月4日(木)午前10時から京大会館において、井村裕夫総長をはじめ、奥田 東、岡本道雄、沢田敏男元総長、西島安則前総長、名誉教授、教職員約180名の出席を得て行われた。

はじめに井村総長から新年の挨拶があり、次いで奥田 東元総長の発声による乾杯ののち歓談、午前10時50分散会した。



部局長の交替等

学生部長

瀬地山 敏学生部長の後任として、益川敏英理学研究科教授(物質・時空基礎論講座担当)が平成7年12月16日学生部長に任命された。任期は平成8年12月15日までである。

留学生センター長

瀬地山 敏留学生センター長の後任として、益

川敏英理学研究科教授(物質・時空基礎論講座担当)が平成7年12月16日留学生センター長に任命された。任期は平成9年12月15日までである。

体育指導センター所長

瀬地山 敏体育指導センター所長の後任として、益川敏英理学研究科教授(物質・時空基礎論講座担当)が平成7年12月16日体育指導センター所長に任命された。任期は平成9年12月15日までである。

名誉博士称号贈呈式

1月8日(月)午前10時30分から総長室において、各研究科長および関係者出席のもとに名誉博士称号贈呈式が挙行され、アメリカ合衆国ウィスコンシン大学バイラス名誉教授ロバート バイロン バード氏に、京都大学名誉工学博士の称号が贈呈された。

また、贈呈式の当日、京大会館において同氏の記念講演が行われた。演題は「ポリマー液体の移動現象」である。

以下に同氏の略歴および贈呈の趣意を紹介する。

(略 歴)

Robert Byron Bird (ロバート バイロン バード)

1924年2月5日生、国籍 アメリカ合衆国

1950年6月 ウィスコンシン大学大学院修了

ク (ウィスコンシン大学) Ph.D. 取得

1951年	ウィスコンシン大学化学科研究員
1952年	コーネル大学化学科助手
1953年	ウィスコンシン大学化学工学科研究員
1955年	ウィスコンシン大学化学工学科助教授
1957年	ウィスコンシン大学化学工学科教授
1964年～1968年	ウィスコンシン大学化学工学科教室主任
1992年	ウィスコンシン大学名誉教授

(趣 意)

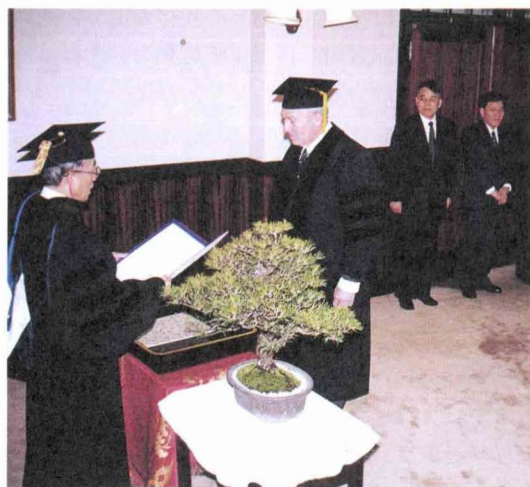
米国国立科学アカデミー会員、ウィスコンシン大学バイラス名誉教授ロバート バイロン バード氏は、気体と液体の輸送係数の分子論的研究及び現象論的研究に数々の優れた業績を挙げ、世界の研究者に多大の影響を与えてきた。

同氏は、気体や液体の粘性係数、拡散係数、熱

拡散係数等の輸送係数に関して現実的な分子間ポテンシャルを用いて統計力学計算を進め、その理論の正しさを実証するとともに、測定が困難な高温や低温或いは混合状態などの輸送係数の推算を初めて可能にした。また、流体の種々の非線形構成方程式の現象論的解析法やエネルギー移動、物質移動に関する解析法を提案し、これらをもとに展開した移動現象論は化学工学をはじめとする工学の広い分野に大きな影響を与えた。さらに工学的に極めて重要である高分子の溶融体や溶液の流動特性についても高分子の分子模型をもとに統計力学理論から解明を試み、高分子の特異な流動現象の起源を明らかにするとともに数々の新しい現象を予測するなど材料科学の分野の研究の推進にも多大の貢献をした。なお、これらの研究成果は研究論文としてのみならず数々の教科書、研究参考書として国内外で刊行され、教育面でも大きく貢献した。

同氏は、1961年11月に初めて本学を訪れ、1962年には6か月間フルブライト交換教授として本学に滞在し、この間、工学部の教育・研究に携わっ

た。同氏の移動現象論は、本学の化学工学研究がエンジニアリングサイエンスを基礎とした研究に転換する契機を与え、また、非ニュートン流体力学分野の研究の発展に大きく貢献した。その後4回に及ぶ来学で学術講演会・研究討論会などを行い、さらに本学の研究者や学生を積極的にウィスコンシン大学に受け入れるなど、京都大学の研究教育に大きな功績を残した。



外国人研究者との懇談会

諸外国から来日し、本学において教育、研究に従事している外国人研究者と本学教官等との交流を促進するため、総長主催による「外国人研究者との懇談会」が昨年12月13日（水）午後6時から、京大会館において外国人研究者115名、受入教官、各部局長および国際交流委員会委員・国際

交流会館委員会委員等60名およびその同伴者計約200名が出席して開催された。

懇談会は、井村総長の挨拶に続き、安藤国際交流委員会委員長長の発声による乾杯で始められた。

なごやかな懇談の中に、外国人研究者の代表2名のスピーチもあり、盛況のうちに午後8時過ぎ閉会した。



平成 8 年度国立学校特別会計予算内示（本学関係）の概要

平成 8 年度国立学校特別会計予算が内示された。本学関係の主な事項の概要は次のとおりである。
なお、主な内容は予算成立後、本紙部局紹介等の記事により紹介する予定である。

事 項	備 考
研究科の新設 エネルギー科学研究科（独立研究科）	4 専攻 修士課程 109人 博士課程 49人 (ヘリオトロン核融合研究センター、原子エネルギー研究所の改組を一部転換)
専攻の設置 (人間・環境) アフリカ地域研究専攻	博士課程 12人 (アフリカ地域研究センターを廃止転換)
専攻の整備 工学研究科 土木工学ほか 6 専攻 農学研究科 森林科学ほか 1 専攻 文学研究科 文献文化学ほか 4 専攻 経済学研究科 経済システム分析ほか 1 専攻	大学院重点化 修士課程 119人→171人 博士課程 62人→80人 学科の再編成 6 学科 305人→2 学科 305人 (重質炭素資源転換工学実験施設を廃止転換) 大学院重点化 修士課程 54人→97人 博士課程 29人→46人 (植物生殖質研究施設を廃止転換) 大学院重点化 修士課程 94人→126人 博士課程 55人→63人 大学院重点化 修士課程 34人→46人 博士課程 11人→23人
事務機構の整備	企画調整官の設置
研究所の改組 エネルギー理工学研究所 防災研究所	原子エネルギー研究所 9 部門 1 客員部門 →エネルギー理工学研究所 3 部門 1 附属施設 (ヘリオトロン核融合研究センターを一部転換) 共同利用の研究所へ改組 16部門11附属施設→5 部門 5 附属施設

平成7年度国立学校施設整備事業の決定（追加）

平成7年度国立学校施設整備事業のうち、本学関係分（追加）は次表のとおりである。

部 局 名	構 造 ・ 階	面 積	備 考
基幹・環境整備（医学部附属病院）	（旧耳鼻咽喉科解体等）	一式	Rは鉄筋コンクリート構造 SRは鉄骨鉄筋コンクリート構造 8-1は地上8階地下1階
工 学 部 校 舎	SR8-1	4,280㎡	
文 学 部 校 舎	SR5-2	4,030㎡	
放射性同位元素総合センター	SR3-2	1,720㎡	
M R I - C T 装 置 棟	R1	220㎡	
看 護 婦 宿 舎 改 修	R	1,480㎡	
基 幹 整 備（吉田地区他）	（情報基盤整備）	一式	

上記事業の実施に際し、工事周辺部におけるご協力をお願いします。

職員会館の閉鎖

本学の教職員の福利厚生施設として、昭和58年10月より利用されてきた「京都大学職員会館（旧近衛ホール）」は、この度京都大学医学部附属病

院看護婦宿舎の改修工事に伴い、同工事期間中看護婦寮として全館利用されることとなります。

これに伴い、1月25日（木）より同会館は閉鎖されます。

（経理部）

<部局の動き>

故藤本浩之輔教授追悼の集い

昨年10月29日逝去された故藤本浩之輔教授の追悼の集いが教育学部主催により、12月7日（木）午後2時から3時30分まで、教育学部第一講義室において執り行われた。

（教育学部）

故高谷秀正教授追悼の集い

昨年10月5日逝去された故高谷秀正教授の追悼の集いが化学系6専攻ならびに工業化学科主催により、12月8日（金）午後2時から3時30分まで、工学部8号館大会議室において執り行われた。

（工学部）

平成7年度文学部博物館秋季公開展示

文学部博物館では、12月9日（土）で平成7年度秋季公開展示を終了した。展示内容、入館者数は次のとおりである。

期 間	展 示 の 名 称	入 館 者 数				
		一 般	学 生	職 員	特別観覧	計
10/24～12/9	外 科 書 の 世 界 近 世 の 肖 像 画	677	297	174	443	1,591
	日本古代文化の展開と東アジア					

(特別観覧とは学術研究、視察その他博物館運営研究及び施設見学等である。)

医学教育ワークショップの開催

平成7年12月28日（木）～29日（金）の二日間、都ホテル（京都）において第一回京都大学医学教育ワークショップが開催された。

医学・医療の変革が迫られている昨今、大学院医学研究科・医学部が大学院医学研究科改組を機会によりよい教育法、訓練の原則と技法を習得し、直面する問題の解決法を身に付け、効果的な医学・医療の教育指導の充実を図るため教授会構成員が合宿して行われたものである。

菊池晴彦大学院医学研究科長・医学部長の開会の挨拶に続いて、京都大学高等教育教授システム開発センター長岡田渥美教授が「Homo educans

…教えるということ」につき、基調講演を行った。タスクフォースには順天堂大学医学部尾島昭次客員教授、浜松医科大学植村研一教授、日本医科大学岩崎 榮教授、日本赤十字社武蔵野短期大学畑尾正彦教授の4氏を迎え、学習目標や学習方略、教育評価法などのテーマについて全体会議と小グループ討論を繰返した。また、医学部における教育の問題点や対応についても討議され、二日目の最後には、井村裕夫総長が「アメリカにおける医学教育とこれからの日本の課題」について講演を行った。

第一日目は朝9時から夜10時まで、二日目も午後5時まで熱心な討議が行われた。

(医学研究科・医学部)



< 栄 誉 >

武内義範名誉教授、中川久定名誉教授、山田康之名誉教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、武内義範名誉教授、中川久定名誉教授及び山田康之名誉教授が日本学士院会員に選ばれた。

以下に3氏の略歴、業績等を紹介する。

武 内 義 範 名 誉 教 授



武内義範名誉教授は三重県出身で、昭和11年京都帝国大学文学部哲学科を卒業後、同大学院に在籍し、同21年より京都大学文学部講師、同23年助教授を経て、同34年より教授となり、宗教学第一講座を担当した。昭和51年停年退官し、同年から愛知学院大学教授となり同61年までその任にあった。その間、ドイツのマールブルク大学およびアメリカのコロンビア大学、ウイリアムス・カレッジ等の客員教授を勤めている。同名誉教授は宗教哲学、実存哲学、浄土教および原始仏教の研究等の分野において数多くのすぐれた業績をあげ、我が国の宗教哲学研究の深化発展に著しい貢献をなすとともに、その研究に世界的視野を導入し、国際的にも大きな影響を及ぼし、東西文化の交流に大きな寄与をなしてきた。またその優れた研究教育によって多くの優れた研究者を指導育成した。

同名誉教授の研究の中心の一つは、印度中国日本における仏教の展開を宗教哲学の立場から解明することにある。その業績の第一群としては親鸞を中心にした諸研究がある。その研究の主なものには『教行信証の哲学』、『親鸞と現代』、『鎌倉仏教の苦悩と目覚め』等がある。これらは、浄土教思想の特質を、キリスト教神学および西欧の哲学の考え方を媒介批判しつつ、人間における宗教哲学的自覚の本質構造として究明したものであって、殊に最初の著作『教行信証の哲学』は浄土教思想の哲学的究明に新時代を開いたものであり不朽の意義をもっている。

浄土教から溯って仏教思想の根源的形態を究明

しようとした原始仏教関係の業績が第二群をなしている。この分野の研究には「原始仏教における禪定の研究」他数多くの論文があるが、それらは“Versenkung im Ur-Buddhismus”, “The Heart of Buddhism”などの著作にまとめられている。これらは、仏教思想の原型を縁起説のうちに見、その構造と意義を、一方日本および西欧の仏教学的研究、他方西欧の哲学の考え方を媒介批判しつつ究明したもので、その精緻な原典研究と哲学的洞察と主体的自覚との結び付きがその研究の他の追随を許さない独自性を与えている。

また同名誉教授の長年の研究を一貫するもう一つの中心は宗教哲学に関するものであり、この分野の研究も大きく多彩である。その研究の特色は、宗教哲学の基本的問題を克明に取り上げつつ、宗教の実証的諸科学の成果を宗教哲学のうちに深く媒介していることであり、さらに個々の問題に関して仏教の思想からくる洞察が西欧の諸研究がおよばない視野を開いていることである。そこでの問題把握とその展開のスケールはきわめて大きく、西欧と東洋の思想的交渉、宗教—哲学—科学の相互的連関と媒介を含んで慎重に強靱に進められてゆく思索は殆ど稀有な力を示している。

さらにまた同名誉教授の、一方親鸞への沈潜、他方長年にわたるヘーゲル研究というありかたが示すように、仏教研究と西欧の哲学との出会いの場が同人の境位をなしており、この点において同名誉教授は西田哲学および田辺哲学の伝統を受け継ぎ、かつ積極的にそれを展開してきた。ここに同名誉教授の研究の意義があり、その研究が海外でも高く評価されている所以でもある。

(文学部)



中川久定 名誉教授



中川久定名誉教授は東京都出身、昭和29年京都大学文学部文学学科を卒業後、同大学大学院文学研究科に進学、同31年同博士課程に進み、パリ大学留学を経て、同36年名古屋大学教養部講師に就任。同助教授を経て、同

46年京都大学文学部助教授、同55年教授となり、フランス語学フランス文学第一講座を担当した。

その間、京都大学評議員、文学部長を歴任し、平成6年に退官して名誉教授になられた。同年より近畿大学教授となって今日に至っている。

同名誉教授は18世紀フランスの思想と文化を中心に、実証的かつ独創的な論文を数多く発表して、国内のみならず国際的にも非常に高い評価を受けている。その研究は哲学、政治思想、小説、演劇など広い分野におよび、方法論としても厳密なテキスト・クリティックに始まって、精神分析、歴史学、比較文学、構造分析などを駆使して、数々の成果をあげた。同名誉教授が出版したデイドロの『セネカ論』校訂版は、初版と第2版の異同を分類編集した画期的な版として、現在でも世界で流通している。この版に基づいた著書『デイドロの「セネカ論」』（昭和55年）においては、デイドロの意識の背後にひそむ世界観、人生観を明らかにした。著書『自伝の文学—ルソーとスタンダール』（同54年）においては、これら二人の作家が書いた自伝的作品を取り上げて、「自伝」の理論的問題から発して両作家の自伝の成立とその意図を検証し、またヨーロッパの近代的自伝の成立という大きな問題まで視野を広げている。また著書『甦るルソー—深層の読解』（同58年）においては、ルソーが生涯にわたって追求した自己救済の問題を、ヴォルテール、デイドロらと比較しながら綿密に検討した。そしてルソーの『対話』の読解を手がかりにして、至福と救済の問題を彼の全著作の中で位置づけた。著書『デイドロ』（同60年）は、デイドロの生涯と作品の全体像を提示すると同時に、18世紀フランスの知的空間や、デイドロの文体について独自の見方を示した。このほか、フランスで出版した『啓蒙主義

と比較研究について—18世紀を見る日本の眼』（平成4年）においては、デイドロ、ルソーの研究に加えて新井白石や中江兆民による西洋文化受容の問題に迫った。

80編を超える同名誉教授の論文は、相当数がフランス語で書かれ、国際的学術雑誌に掲載されている。また我が国最初の本格的フランス語大辞典『ロベール仏和大辞典』の編集、数度の国際シンポジウムの主宰なども特筆に値する。毎年のように学会や国際会議で学術講演および研究発表を行い、平成5年からは国際18世紀学会副会長を務めている。

同名誉教授は上記諸研究を通じて、我が国のフランス文学研究における主導的役割を果たし、その研究水準を著しく高めるのに大きな貢献を行った。また、高い識見と卓越した指導力によって、数多くの優秀な研究者を世に送り出してきた。この研究・教育業績に対して、日本フランス語フランス文学会辰野賞（昭和42年）、フランス政府パルム・アカデミック勲章（同60年）、京都新聞文化賞（平成5年）を受けた。

（文学部）

山田康之 名誉教授



山田康之名誉教授は、大阪府出身で、昭和32年京都大学農学部農芸化学科を卒業後、引き続き同大学大学院農学研究科修士課程を修了し、同35年より同農学部助手、同42年同助教授を経て同57年同附属生物細胞生産制

御実験センター教授に昇任した。昭和59～63年には同センター長、同61～63年文部省高等教育局科学官を併任した。平成2年より同農芸化学科教授となり、分子細胞育種学講座を担当した。平成6年に奈良先端科学技術大学院大学教授となり現在に至っている。なお、平成7年まで京都大学農学部教授を併任した。

同名誉教授は我が国における植物細胞培養技術を確立した最初の研究者の一人であるのみならず、その植物培養細胞系を用いて次々に新しい研

究分野を開拓して、分子細胞生物学のレベルにまで発展させた貢献は大きく、この研究領域における第一人者として卓越した業績を挙げている。

同名誉教授の研究は極めて多岐にわたるが、特筆すべきは植物培養細胞を駆使した細胞生物学と分子生物学に関する研究である。同名誉教授は高等植物の細胞培養の重要性、有用性に初期から着目し、特定の生理作用（光合成機能や二次代謝機能など）を強く発現する細胞を選抜して大量培養する実験系を確立した。

同名誉教授が確立した光独立栄養タバコ培養細胞とその利用は植物一次機能解析の新しい手法として定着している。一方、同名誉教授は、ベルペリン、アロモリン、シコニンなどの植物由来有用物質を産生する能力の高い細胞を選抜して大量培養法を検討し、これらの物質を工業的大量生産する方法を確立するとともに、これら細胞・培養根を用いて、アルカロイドの細胞内における生合成過程・反応機構の実体の究明とその律速過程の解

明、さらにはその分子生物学的研究領域へと展開した。特に、重要な植物二次代謝産物であるトロパンアルカロイドのオルニチンからスコポラミンに至る生合成過程の主要な物質変換機構の解明は特筆される。また、植物本来の産生するアルカロイドを分子育種的に改変する技術的、学問的基盤を世界で初めて確立している。以上のように次々に新しい研究分野を開拓し、植物分子細胞生物学の基礎とその応用に大きく貢献した成果は国際的にも極めて高い評価をえている。

同名誉教授は国内外の重要学会の枢要な地位にあり、これら学問分野を先導するとともに、多くの人材を育成した。また、同名誉教授はこれらの研究成果により昭和62年島津賞、および日本農芸化学会賞、平成元年スウェーデンウプサラ大学名誉理学博士、同3年には日本学士院賞を授与され、同6年スウェーデン王立科学会（ウプサラ）の外国人会員に選出されている。

（農学部）

—公開講座—

農 学 部

「生物のマクロから超ミクロまでの
スケールトラベル体験」

農学部林産工学科では、昨年11月19、23、26日および12月25、26日の5日間、午前10時から午後4時まで、高校生を対象にした公開講座「生物のマクロから超ミクロまでのスケールトラベル体験」を開催した。この公開講座は平成7年度理工系教育推進プロジェクトによるものである。受講者数は50余名で、京都市内はもとより、遠く宮津、福知山、水口などからの参加もあった。参加者の通学校は様々で、学年としては高校2年生が最も多く、また男女比はほぼ同様であった。

11月下旬の前半の部は「樹木の多様性と生育環境」および「各種顕微鏡によるミクロ体験」と題して、身近な樹木を通しての生物のマクロから超ミクロまでの“スケールトラベル”を実習を通じて体験してもらった。12月下旬の後半の部では趣を変えて、学校や家庭ではなかなか体験することのできないコンピュータの利用に関する実習を



行った。いずれも高校生達の知的好奇心をくすぐる内容となり、高校生ならではの奇抜なアイデアが出て予定の時間を超過する一幕もあった。

講座の最後に行ったアンケート調査によれば、受講者のほとんどが「理系の大学や研究の面白さが何となくわかった」と述べており、同様の公開講座があれば是非また参加したいと言う声も多かった。

（農学部）

<保健コーナー>

突然死と虚血性心疾患

何か症状が現れてから24時間以内に起こる予期せぬ死亡がいわゆる突然死と言われるものです。年間人口10万人あたり70～80人が突然死し、その頻度は交通事故死の約6倍に相当します。突然死のうち約6割を、特に1時間以内の死亡では8割を心疾患が占めると言われています。若年者では先天性の心疾患や心筋症の頻度が高く、40歳以後では虚血性心疾患（狭心症、急性心筋梗塞症）の割合が多くなります。虚血性心疾患の他の病気との最も大きな違いは初めての症状（冷汗を伴う激しい胸痛）が直接、突然死につながるということです。心筋梗塞症では発症後病院に運ばれるまでに30～40%の症例が亡くなるとの報告もあります。心筋梗塞の際には“締め付けられるような”あるいは“重い石を胸に乗せられたような”胸痛を伴うことが多いのですが、中には痛みを伴わないこともあり、心筋梗塞という病気を知っている人でも発症当初それとは気付かない人も多いようです。

血管の動脈硬化は20歳前後から徐々に起こり始め、症状としては男性の場合40歳過ぎから、女性の場合閉経後50歳台から多く認められるようになります。冠状動脈（心臓の筋肉に酸素や栄養を送る血管）の径が70%以上狭くなって血流が減少すると労作時（血圧や脈拍の増加する状態で、食後や怒っている時も含まれる）に狭心症の症状が始めます。安静時の心電図が正常だから狭心症でないとは言えません。心臓に負担をかけた状態で心電図を取らないと狭心症の診断はできません。心筋梗塞は冠状動脈の動脈硬化を来した部位に一部亀裂が入り、その部位に血栓（血の固まり）が付着しその内腔が完全に閉塞することにより起こります。この血栓形成は動脈硬化の程度が軽い場合にも起こり得ます。すなわち狭心症のない症例でもいきなり心筋梗塞は起こります。初めての胸痛、今までであった胸痛の頻度、持続時間に変化が認められる場合、あるいは安静時にも起こる胸痛、これらの症状を伴うものは不安定狭心症と言われるもので、その発症に血栓の関与が疑われ、心筋梗塞に移行する頻度が高いと考えられています。この時点でしかるべき処置をすれば、突然死につながるかもしれない急性心筋梗塞の発症を予

防することができます。

しかし、すべての症例でこのような前駆症状を伴うわけではなく、先にも述べましたように最初の症状が心筋梗塞によるものであるという事があります。この予防にはやはり、動脈硬化の危険因子を減らす事しか現在では手だてがありません。高血圧、糖尿病、高脂血症、喫煙、肥満に対して、日頃から対処することが必要です。また、血縁の人で虚血性心疾患を有している場合、その未知の危険因子を遺伝的に受け継いでいる可能性もあり、注意が必要です。高血圧はその他に症状を伴わないことが多く、知らず知らずの内に動脈硬化、心機能の低下（心肥大）を促進し俗に silent killer と呼ばれています。心臓や血管は他の臓器と同様にある程度の予備能力を持っていますが高血圧を放置すると本人の知らない間にその予備能力を使い果たしてしまうことになるのです。糖尿病にはカロリー制限や運動が必要です。運動は一日に一万歩程度歩くことが必要で、車を使う機会の増えた現在ではなかなか達成出来ない数字です。高コレステロール血症では悪玉のコレステロール（LDL コレステロール）の増加、善玉のコレステロールである HDL コレステロールの減少を来し、いずれも虚血性心疾患との相関が認められます。その対策としては動物性脂肪の摂取を減らす事が必要です。卵一個で一日に必要なコレステロールは含まれておりそれほど多く摂っていないと思っている人でも実は沢山食べている事が多いのです。青魚（鯖、秋刀魚、鰯）に含まれる脂肪は血中の悪玉のコレステロールを下げます。また、運動は HDL コレステロールを増加させ、ストレスは HDL コレステロールを減少させます。

虚血性心疾患の診断、治療には近年目覚ましい進歩が認められます。冠状動脈造影により冠状動脈のどの部位にどの程度の動脈硬化があるのかがわかり、それに対する治療も薬物療法あるいは冠動脈形成術（狭い所を風船で押し拡げる風船療法）や手術（大動脈—冠動脈バイパス術）と多岐にわたります。

突然死を防ぐための対策を講じる機会は上述のように色々あります。それぞれの機会を有効に活かしたいものです。

（保健診療所 青山 武）

—京都大学の百年（第15回）—

京都帝国大学以文会と学生集会所

京都大学において以文会といえは、文学部が創立五十周年を一年後に控えた昭和30年（1955）4月に、有名無実の存在となっていた同窓会の京大倶楽部（昭和8年4月創建）を再建した際に改称されて今に続いている「京大以文会」を指すことになっているようである。文学部の職員と出身者を会員とし、所属学生を準会員とする「京大以文会」は、毎年秋に会誌『以文』（第3号までは『京大以文会会報』と称した）を発行して随想、追悼文や教室だよりなどを掲載し、最新号は第38号となっている。以文会という会名は、『論語』顔淵篇の「曾子曰、君子以文会友、以友輔仁（曾子いわく、君子は文を以て友を会し、友を以て仁をたすく）」という有名な箴言を出典とするので、同じ名称をもつ親睦会がほかに存在しても何ら不思議ではない。それにしても、京都大学の創設期に全学の親睦団体として「京都帝国大学以文会」があって『以文会誌』を発行し、現在の同学会の前身に当たるという史実はあまり知られていない。この以文会は、法科、医科、文科、理工科の各分科大学に所属する学生のみならず、職員と卒業生有志を会員としていたのである。

「京都帝国大学以文会」の会名は幸田成行（露伴）講師の命名にかかるが、その簡略な沿革は、たとえば『京都大学概覧 昭和廿二年』の同学会の項に、「同学会は学生を中心に相互の親睦を計り、その生活全般の発展向上を目的とした団体である。古きに溯れば明治三十二年十二月運動会として誕生し、四十二年九月に大学全般の親睦を意図した以文会が成立した。大正二年三月にはこれ等を併合した学友会が組織され、又昭和十六年四月大学通則を改正し、教育の補助機関として、その名称も同学会と改められたが、更に二十一年十二月に至り、同学会は根本的に改組され、全学生の自治団体として新発足をした」と見える通りである。

ところで、現在では学生の課外活動の施設の一として、音楽部交響楽団などの練習場や合唱団、書道部、囲碁部などのクラブBOXに活用されている〈学生集会所〉は、もともとは以文会が活動する会場として、明治44年（1911）1月末に新築落成されたのである。同年4月刊の『以文会誌』第3号に、正式には学生控所と称された木造二階建ての「学生集会場」が田中通（現東山通）近衛上ル東側の元法医分教室の跡に新設された次第と、その開場祝を兼ねて階上で開かれた以文会大茶話会が総長菊池大麓をはじめとする870余名の参加者をえて盛大に挙行された模様を、詳細に記録している。なお、学生集会所の東南に隣接する楽友会館は、大学創立二十五周年記念事業の一として、おもに職員と卒業生らの使用に供するために建設されたのであるが、時あたかも関東地方を襲った大震災の災害状況に鑑み、鉄筋コンクリート建築として設計され、大正13年（1924）5月に竣工した。「楽友」の名は時の総長荒木寅三郎の命名によるもので、『礼記』学記篇の「樂其友而信其道」を出典としている。

以文会という会名が由来した「以文会友」なる四字句は、学内や国内の親睦あるいは文化交流を標榜するに止まるものではなく、ときには国際交流の際にも用いられる。昭和3年（1928）に中国から来日して、囲碁界に新風を吹き込んだ呉清源が、〈現役引退披露・古稀・来日五十五周年記念出版〉と銘うった回想録を、『以文会友』（白水社、1984年）と題したのは、その一例である。京都大学人文科学研究所の前身の一である独逸文化研究所は、昭和9年（1934）に、当時の日独両国における政治社会状況の近接を背景として設立されたが、東一条交差点の西北隅に新築された所屋の正面玄関の上に掲げられた木製扁額にも、元首相の清浦奎吾（1850～1942年）の揮毫にかかる「以文会友」の四字が刻されていた。京都の地に独逸文化研究所の創設を提唱し尽力したのが、清浦だったのである。村野藤吾（1891～1984年）の初期の設計作品にかかる瀟洒な所屋は、人文科学研究所の分館として引き続き使用されていたが、老朽化して危険となったこともあり、改築のために取り壊された。ただし「以文会友」の四字額は、昭和51年（1976）に落成した新館の二階談話室に掲出されている。

（百年史編集委員会 礪波 護）

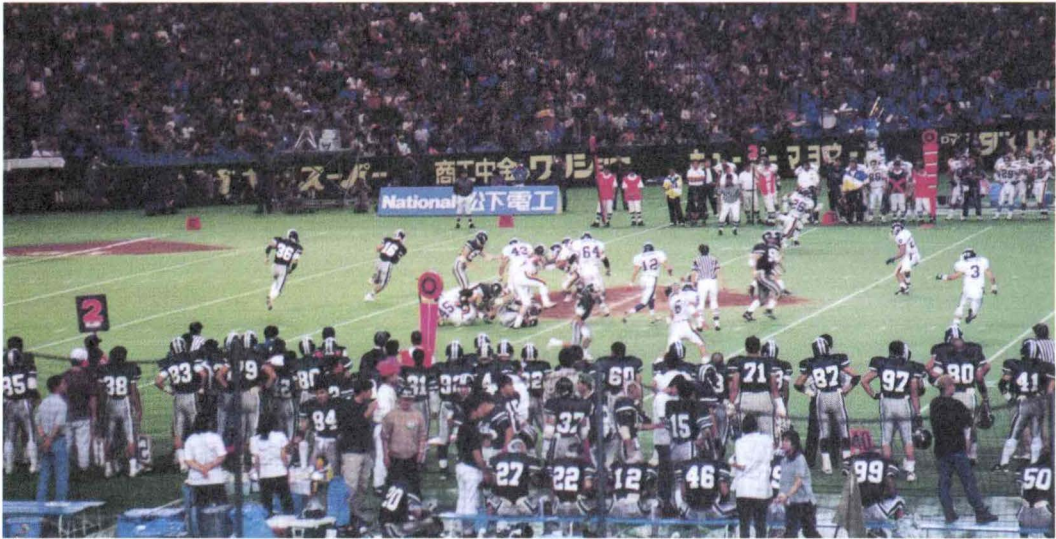
アメリカンフットボール部 8年ぶり 4度目の日本一

1月3日(水)、アメリカンフットボールの日本選手権(第49回ライスボウル)が、東京ドームに5万1千人の観衆を集めて行われ、京都大学(学生代表)が2年連続3度目出場の松下電工(社会人代表)を35対21で破り8年ぶり4度目の日本一に輝いた。学生の日本一は、平成2年度の日本大学以来5年ぶりである。最優秀選手(MVP)には、阿部拓朗(農学部4回生)が選ば

れた。

これに先立ち、昨年12月17日(日)、第50回甲子園ボウル(東西学生王座決定戦)が阪神甲子園球場で行われ、京都大学(関西1位)が2年連続3度目出場の法政大学(関東1位)を24対17で破り、3年ぶり5度目の学生日本一に輝いた。

なお、この大会における表彰選手は、年間最優秀選手(ミルズ杯)には、伊藤重将(農学部4回生)、最優秀選手には、杉本 篤(工学部3回生)が選ばれた。



(学生部)

日 誌

(1995年12月1日～12月31日)

- | | | | |
|-------|--|-----|---------------|
| 12月1日 | スペイン ガリシア州政府 Victor Manuel VAZQUEZ PORTOMEÑE 文化大臣他20名来学、総長および関係教官と懇談 | 12日 | 建築委員会 |
| 6日 | 人権週間に因む研修会 | 13日 | 環境保全委員会 |
| 7日 | カナダ トロント大学 Heather Munroe-Blum 副学長来学、総長および関係教官と懇談(8日まで) | 〃 | 核燃料物質管理委員会 |
| 〃 | 能楽鑑賞会 | 〃 | 外国人研究者との懇談会 |
| 12日 | 評議会 | 18日 | 附属図書館協議会 |
| 〃 | 京都大学後援会助成事業検討委員会 | 20日 | 国際交流委員会 |
| | | 〃 | 国際交流会館委員会 |
| | | 〃 | 放射性同位元素等管理委員会 |

訃 報

後藤廉平 名誉教授

本学名誉教授 後藤廉平 先生は、12月7日逝去された。享年90。

先生は、昭和5年京都帝国大学理学部化学科を卒業、同大学理学部副手、助手、化学研究所助手、講師、助教授を歴任の後、同21年、京都帝国大学教授に就任、コロイド化学研究部門を担当された。昭和36年12月から3年間、京都大学化学研究所長ならびに京都大学評議員として京都大学の行政・運営に参画された。化学研究所長在任中には多くの困難を克服して化学研究所の高槻市から宇治市への移転を決定され、今日の化学研究所の発展の基礎を築かれた。昭和44年、停年により退官、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和54年3月まで、京都産業大学理学部教授を務められた。この間昭和51年4月から同53年3月まで理学部長として管理運営に貢

献され、退職後京都産業大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、気体爆発反応の研究に取り組み、反応の不均一性の立場から幾多の輝かしい業績をあげられた。この業績に対し、昭和19年3月、日本化学会から桜井褒章を授与された。さらに先生は、研究範囲をコロイドおよび界面化学の分野にも伸ばされ、特に誘電率測定や赤外吸収スペクトルなど新しい物理的測定手段の導入に尽力され、従来の方法で解明し得ない幾多の事実の解明に輝かしい成果を取められた。主な著書に『気体爆発反応』、『膠質化学』、『レオロジーとその応用』、『物理化学実験法』などがある。

また先生は、昭和33年度日本分光学会関西支部長、同38年度日本化学会近畿支部長などを歴任し、学会の運営と発展に尽された。これら一連の教育・研究・行政ならびに学会活動により、昭和50年11月勲二等瑞宝章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(化学研究所)



＜随想＞

町の天文台から

名誉教授 小暮 智一

学問に限らず、多くの分野でプロとアマチュアの協力がその分野の発展と活動の原動力になっている。

天文学もそのような分野の一つと考えられている。実際、新しい彗星や新星の発見など日本のアマチュアの活動は世界的にも良く知られている。しかし、それでは日本ではプロとアマの協力がうまく行っているかと云えば、実状はそうでもない。戦前は本学の山本一清教授のようにアマチュアの育成に努められ、アマチュアとの深いつながりを持つ方もおられたが、戦後は太陽系天体や軌道計算などの特別の分野を除くとアマとプロは別々の世界ようになってしまった。天文学会にはプロとアマの会員がいるが、アマチュア会員は学会の研究活動からほとんど疎外されているのがこれまでの実状である。

天文学の歴史を振り返ってみると18、19世紀の頃、天体観測をリードしていたのは、むしろ進んだアマチュアたちであった。彼らは1メートルを超える大型望遠鏡を製作したり、王立天文協会などを設立して情報の交換に当たったりした。中世の気風を残す当時の大学にはそうしたチャレンジ精神はなかった。

20世紀に入ると観測のリードはプロに移る。その理由は天文学が巨大科学の一面を持つようになり、新しく発見された中性子星、準星、X線天体などはどれも微光でアマチュアの望遠鏡では手が出ないものだったからである。望遠鏡が巨大化、高性能化し、また、電波、紫外線、X線などの観測となるとこれはもう全くプロの世界である。

しかし最近事情が少し変わりつつある。アマとプロの協力が云われ出したのである。主な理由は、第1に、写真に代わる高感度のCCDと呼ばれる受光素子の普及によって写真の20～30倍を超える高感度観測がアマでも手軽に行え



るようになったこと。第2に、殆どの天体に変動が観測され始めたこと。星から活動銀河核まで数時間、数日、数年と云ったいろいろの時間規模の変動が観測されると観測者の数がたくさん必要になる。天体の変動はアマの観測者の得意とするところである。第3に、地方自治体が競って大型望遠鏡をもつ公共天文台の建設に乗り出したこと。などであろう。私が関係するのは第3の点である。

従来の公共天文台の望遠鏡は観望専用で光学系の仕様が甘いと同時に、プロとの協力も殆どなかった。プロ仕様なら口径60cmでも十分に学問的に意味のある観測が可能になる。

こうした普及と観測を始めから意図した公共天文台は1990年に設立された西はりま天文台が最初である。ここの望遠鏡は口径60cmであるが研究者の台員が研究と普及に当たっている。その後1993年に岡山県美星町に現在私の勤めている美星天文台が開設された。この天文台は口径が101cmと公共天文台として初めて1メートルを超えたと言うばかりでなく、研究者の台員とアマチュアの協力のもとに、木星や新星などですでにいくつかの観測成果をあげ、普及にも良い効果を与えている。その後、他の自治体でも1メートルを超える望遠鏡を持つ天文台を建設し始め、すでに4か所がオープン、数か所で建設が進んでいる。幸いこれらの天文台は観測面に力を入れ、プロとの協力も進んでいるので、こうした公共天文台がこれからの潮流になることが期待される。

近年は国連でも発展途上国の科学水準の向上に力を入れており、天文・宇宙科学も重要な課題となっている。そのための関連ワークショップが定期的に開かれるようになってきている。また、中国、インドネシア、スリランカなどアジアの国々の関係者も日本の公共天文台のあり方に注目している。今後は国際協力も大切な課題になるであろう。小さな町の天文台でも大きな仕事の出来る時代になりつつあると云えそうである。

(こぐれ ともかず 元理学部教授 平成2年退官 専門は天体物理学)

